批評

「河內國府石器時代遺跡發掘報告」（京都文科大學考古學研究報告第二册）を讀む

文學博士　喜田貞吉

一、緒言

京大考古學研究報告第一册「肥後に於ける裝飾ある古墳及び横穴」を本誌上で批評した余輩は、更に其の第二册、「河內國府石器時代遺蹟發掘報告」をも批評すべく、本誌の編者から依囑せられた。濱田教授が此遺蹟を發掘せらるゝに至つた經路に就いては、余輩少からず之に關係を有して居た。隨つて余輩は、其の結果に就いて、甚だ多くの興味と期待とを有し、爲に屢々其の發掘作業にも立ちあつた程で、其の報告の發表を鶴首して待つて居たのである。此の樣な間柄であるから、余輩はこゝに喜んで其の囑に應じ、本書を廣く學界に紹介し、かねて管見を披瀝して、濱田教授並びに世の斯道諸賢の一顧を煩はしたいと思ふ。

由來河內國府の遺蹟は、これまでも多くの學者によつて注目されて居た塲所である。こゝで石器を採集された人も少くない。中にも神戸の福原潛次郎氏の如きは、其の蒐集の數無慮一千箇以上にも達して居る。一昨大正五年夏、余輩福原氏を其の神戸の邸に訪うて、是等の遺品を閲覽するの機

を得たが、其の品の中に、大形な粗造の石器が少からず存在して居た。福原氏の談によると、石鏃・石庖刀等、精巧な小形のものは、表面に近い所にあつて、此等の大形のものは、更に深い、砂利層の下の粘土層の中から採集したとの事であつた。果して其の言の如くならば、其れは舊石器時代の遺蹟らしい、須らく實地に就いて親しく研究して見るべきであるといふのが、余の意見であつた。それは本書中にも引用された余の河内富田林講演筆記に見ねて居る通りである。濱田教授の此の發掘も、實は右の疑問が一つの動機を與へたのであつた。斯くてそれに引き續き、鳥居氏・本山氏・大串氏等の調査ともなつて、此の遺蹟は、學界に非常なる好資料を提供する事となつたのである。

ところが、何をどう間違へられたものか、鳥居氏の「有史以前の日本」には「私の東京出發前大正六年七月までは、某氏に據て盛に畿内に古石器時代石器の存在を稱へられて居つたが、私は一度河内大和地方を實踐調査して見ると、毫も斯くの如き形跡はなく……明かに新石器時代のものです」とて、暗に余輩が舊石器時代石器の存在を說いたかの如く述べて居られる。是は余輩に取つては思ひもよらぬ事として、序ながらこゝに一言辯解して置きたい。又それが同じく新石器時代の遺蹟であるといふ事の如きも、昨年六月上旬の濱田教授の調査によつて、既に立派に確められて居るのである。必ずしも鳥居氏が一度實踐調査して、それで始めて明かになつたのではない。是れ亦序ながらこゝに一言して置く。

そはともかくもとして、國府遺蹟調査の動機を學界に與へた事に就いては、福原氏の直接間接に與へられたる功績を、こゝに特筆大書せねばならぬ。斯く云へば福原氏は、所謂「過ちの功名」といふ事に當つて、氏に對し甚だ失禮な樣ではある

が、實は福原氏の言必ずしも間違とは言へない。福原氏は濱田氏の發掘せられた低いA地點の「骨地」と、高いB地點の「乾」との間の斷崖に、明かに砂利層の露出を認められた。斯くて其の下方なる「骨地」の粘土中より、親しく不整形の大形石器を採集せられたのである。氏が余に語られたのは、畢竟其の事實ありのまゝのものであつた事と思ふ。然るに、當時なほ實地を知らざりし余は、砂利層の下に更に本來石器を包藏する粘土層のあるものと速斷し、果して然らば是れ舊石器時代のものらしいとの疑問を起したのであつた。疑問は進歩に赴くの階段である。余輩は余輩の此の疑問が、國府遺蹟調査の因をなしたかと思ふと、學界の爲に滿悅の微笑を禁ずることが出來ない。今本書を評するに當り、先づ福原氏の爲に之を辯じて、所謂「過ちの功名」を當方に收めたいと思ふは如何に。呵々。

二、概評

濱田氏の報告は前後二部に分れて、前編は之を序論・發掘・遺物の三章に分ち、一々事實ありのまゝの報告を叙述せられて居る。後編は其の發掘の結果に關する著者の見解で、所謂大形粗石器の意義、土器の系統及び人種問題にまで及んで居るのである。

前編の報告は例によつて精密なものである。其の圖版も懇切明瞭である。隨つて余輩は十分之に信賴して、其の發掘狀態の實際を知る事が出來るのを感謝せねばならぬ。殊に石器土器の極めて細かい破片をまでも採集して、余輩の如き素人ならば、初手から捨てゝ顧みなかりさうな程のものをも、一々丁寧に並べて、比較調査せられた煩勞は、多とすべく、考古學は斯くの如くにして研究すべきものだとの範を示されたことに就いては、更に深く感謝せねばならぬ。

たゞ余輩は、其の報告中に於て、A地點即ち低い「骨地（はねち）」の方の發掘の結果に就き、多少の疑念を持たぬでもないことをこゝに告白する。濱田君の記述に從へば、低い「骨地」のA地點も、高い「乾」のB地點も、土壤並びに埋藏物の關係殆ど同樣で、隨つて其の骨地の地域が、嘗て洪水によつて洗ひ去られたといふも、實は表土の一部分のみであつて、元來現在の高さと大差なかつたものゝ如くに述べて居られるが、果してさうとのみ解せねばならぬであらうか。勿論此の地はもと緩傾斜をなして居たのを、それを人工を以て階段的に水平の畠地（或は水田）に作つたものには相違ないが、「骨地」と「乾」との高低の差異は、それにしては餘りに甚しい。本書によるも約二米突の多きに達して居る。而して其の間の斷崖には、明かに厚き砂利層を露出し、其の下方なる「骨地」は、福原氏の所謂「砂利層の下の粘土層」たるの感あらしめるものである。されば單に地形のみを案ずるも、其の地が嘗て洪水の爲に洗ひ去られ、多量の遺骨を出した後、附近の臺地の耕土をこゝに運んで、之を平らしたものだとの地主の言は、必ずしも捨て難いものと思ふ。果して然らば、A地點から發見したる遺物は、もと土壤と共に、附近の臺地より運ばれたものであつて、本來ひどく攪拌されたる末のものであるかも知れないのである。是は更に實地に就いて研究を重ねて見たいと思ふ。

B地點に於ても、余輩は甚だ多くの攪拌が、過去に於て行はれたものであることを豫想する。それはもと此の地が傾斜地であつたものを、何時の頃にか階段的に水平な畠に作りかへる爲には、必然的に起つたものであらねばならぬからである。而して此の攪拌は、もと低かつた東の方に殊に多く、もと高かつた筈の西の方の表土がこゝに移されたものであらう。從つて其の移された部分の土

壌は、本來層位的調査の上には何等價値のない筈であることを覺悟せねばならぬ。而して京都大學の發掘したB地點は、恰も此の比較的攪拌の度の多かるべき東部に偏して居る塲所であつた。其の第四回に大串博士等の掘られた中の西部に偏した地點は、表土が少くて、人骨が極めて表面に近く存在して居た。是は嘗て其の表土を削つて、低い東部の地點を地上げした結果である。隨つてそこには彌生式土器の包含も少かつた。京大發掘の地點に於て、瓦や、朝鮮式陶器（本書に所謂齋瓮のこと。古書に所謂「齋瓮」は、恐らく彌生式系統の土器と思はれるから、混雜を避けんが爲に特に余輩は此の名稱を用ひたいと思ふ。詳しくは歴史地理三一卷五號を見られよ。）などが、彌生式土器と混亂して存在して居たのは、もと高い西部の地點から、是等の遺品を或る程度まで層位的に包含して居た土壌を、こゝに運搬した際に起つた混亂に外ならぬと思ふ。本書に、是等の注意と說明との見ぬのは、稍物足らぬ感がないでもないが、併し本書の脫稿したのは、大串氏等の第四回發掘の前であるから、說いてこゝに及ばぬも無理はない。本書に「第一層にありては齋瓮（即ち爲に云ふ朝鮮式陶器の事、以下便により余輩も本書の用例に從うて、記述しようと思ふ。）古瓦・彌生式土器併存し、第二層に入りては、古瓦を認めず、漸次深さを增すに從つて、齋瓮類を減じて彌生式土器のみ多く、第三層に至りて、彌生式土器亦稀少となり、其の層間より人骨に附隨して繩紋土器に近き特殊の土器を見たるのみ」とある所謂第一層は、運搬によつて攪拌せられた土壌で、其の第二層以下が、該地點に於ける當初の第一層たるべきものであつたであらうと思はれる。隨つて現在の第一層もと低かつた筈から（その東部に於ける）、曲玉や、管玉や、銅鏃などが出ても、それが石器とどんな關係のものであるかは、十分考究を要する事であらう。是は濱田君も夙に御承知の筈であるが、素人の爲には此の說明が欲しかつた。

後論として述べられた大形石器の意義、土器の

系統、特に其の人種問題に就いては、學者各々異論のある事であらう。余輩も左に其の贊成すべきは贊成し、なほ如何と思はれるものには、忌憚なく所見を述べて見たい。

三、所謂大形粗石器に就きて

たゞに國府の遺蹟のみと言はず、大和あたりからも、大形粗製の、一見舊石器に髣髴たる遺物の出るのは事實である。鳥居君は其「有史以前の日本」三七―三八頁に於て、「畿內には珍らしい大石器が存在するなどいふ學者がありますから、私は其の實物を見ると、這は大石器でなく、全く普通の形狀である。……武藏多摩河畔の打製石斧と比較すべきもので、別に畿內に特別は大石器と稱する程のものはない」と言つて居られる。果してさう解すべきものであらうか。他の地方にあまり類例を見ない樣な、而も確かに人工を加へたに相違ない石片の存するのは、明かな事實である。それを石器と見るか見ぬかゞ問題で、余輩は此點に就いては、大体に於て、濱田君の本書の說に贊同したい。其の石片の中には濱田君の言はるゝ如く、エヴアンス氏の謂ふ如く、小石器を製する際に生じたる缺き殘りのものが必ず多からう。濱田君が早く此の點に着眼せられたのは、流石に廣く泰西學者の研究を涉獵せられた結果で、余輩の到底及ばざる所として、敬服の外はない。蓋し是等の地方がもと石器製造の行はれた所であることは、小石片の、甚だ多く存在して居ることからでも知られる。而して其の原石は、石質自然の條理に從つて打ち缺くべきもので、隨つて其の缺き殘りが、條理のまゝに偶然或は石槍形となり、或は扁桃形となつて存するのは、敢て不思議ではない。而して其の間には、確かに石器として使用するに堪ふものゝ、偶然出來ることをも疑はぬ。濱田君は之を以て「單に偶然の事實により、最原始的なる石器製

作法の、復現せせられたるものとするの外なきなり」と言つて居られる。是れ「或は然らん」であらう。余輩は其の「偶然の事情」といふには贊成するが、「原始的製作法の復現」といふは如何かと思ふ。他にも彌生式の石器時代遺蹟は多い。玻璃質安山岩の石鏃を發見する場所も少くない。而も其の各地に於て、必ず此の種の石器が併び存在する譯ではない事に注意したい。思ふに石器製造の際に生じた殘石が、偶然石槍に似、或は石斧として利用され得る場合には、直ちにそれを石器として用ひたであらう。或は更に多少の加工を之に施して、實用に供した事もないではなからう。もと福原氏の採集品で、割愛によつて目下余の有に歸して居る所の本書第五圖の2の如きは、尖端及び左右の刃が確かに鋭利なるべく作られたものである。決して缺き殘りの石片とは認められない。さりとて、固より之を以て普通の石槍とも同一視するとは出來ぬ。蓋し斯くの如きの石器が、他の多くの彌生式遺蹟に發見されないで、ひとり國府等、單に限られたる或る遺蹟にのみ存するのは、それが普通品ではないだけに、他に移出する事少く、製造地でのみ用ひられたではあるまいか。隨分無器用なものではあるけれども、爪で引つ掻いたり、拳でなぐり付けるよりは遙に有効であつたであらうと思はれる。

四、土器の系統に就いて

繩紋土器も彌生式土器も、もと一の原始繩紋土器から起つたとの土器系統論は、全く濱田君の創見の新說で、本書中要重の地位を占むべきものである。固よりそれに就ては、御當人も未だ之を以て定說なりと自任して居られぬだけに、學者の間に贊否の議論も多からう。而して余輩は、今日の研究の程度に於ては、旗幟最も鮮明に、抗議を提出して見たいと思ふ。

濱田君の此の系統論には、無論傾聽すべき所が多い。此の點に於ても流石に氏が廣く泰西學者の研究を渉獵せられて居られるだけに、諸地方の類例に比較して、こゝに此の新說を試みられたるところ、確に敬服に値するものがある。反對論者たる我等に取つても、須らく之を以て他山の石として、氏の新說の上に、反省する所がなければならぬ。併しながら、特に我が彌生式土器と繩紋若くは唐草樣紋土器との關係の場合に就ては、必ずしも他の傍例を以て推す譯には行き難い。或は濱田君があまりに廣く傍例に通じて居られるが爲に、却つてそれに囚はれて居らるゝ傾が無いのではなからうか。

余輩と雖濱田君と共に、確かに或る遺蹟からは繩紋土器風の物と、彌生式土器と混出するものあるの事實を認める。併しながら其れも既開墾地に於て存在するものゝ如きは、攪拌の結果混亂を生じたものだと認定すべきものが無いではなからうか。彌生式土器が因て其の名を得た、東京彌生岡の貝塚の場合の如く、アイヌ式遺蹟中へ明かに他より移入せられたものが、混在したと認むべきものも、亦少くないのではなからうか。而して余輩は又一方に於て、確かに両者が層位的に、若くは場所を異にして近接したる地點に、保存されて居るの事實を認める。氏も親しく調査せられた薩摩摺が濱の遺蹟の如きは、所謂層位的存在の一例らしい。大隅哈良なる横尾の丘上には、小さい谷を隔てゝ一方に唐草樣紋土器のみ、他方に彌生式土器のみが發見せられる。是等層位的に或は近く隣接して、異なりたる系統の土器の存する場合の如きは、決して一方の土器の意匠が順に變化して、他方のものとなつたとは認められない。時代を異にして別の意匠を有する民族の部落が、其同一地點に起つた、若くは前者と隣接して出來たのであ

つたと認める外はあるまいと思ふ。而して余輩は、特に此の河内國府の塲合に於て、痛切に之を感ずるものである。

河内國府の遺蹟は、既に述べた如く、もと傾斜面に存したのを、一方の高地を削りて他方の低地を補ひ、以て其の高低を、平均せしめたものである。隨つてもと低かつた方には、上部に石器土器混亂包含の土壤の層を存し、もと高かつた方は、殆ど其の土壤を失つて居る。而して、京大が此の低かつたB地點を發掘した後に、高かつた他の地點へまでも漸次發掘作業が行はれて、前後數十體の人骨が此の遺蹟で發見された。而して其の人骨のある塲所から採集される土器は、殆ど悉く繩紋土器の破片のみで、中には完全なるものもたゞ一個發見せられて居る。而して後世何かの都合で、深く耒耜を加へたが爲に混入したかと疑はるゝ、極めて少數の所謂齋瓮並びに彌生式土器片の存在以外、其の上層からは甚だ多く發見せらるゝ此等の陶器土器の一小片だも、人骨埋藏の層位からは認められないのである。此の塲合に於て、其の繩紋土器が漸次變じて彌生式土器となつたとは、如何にしても考へ得られないではないか。又彌生式土器と所謂齋瓮土器との間には、時に共通類似の意匠に出づるものがあるけれども、そは民族融合の結果とも解すべく、兩者本來性質を異にするものなることに就いては、余輩に確乎たる持論がある。これは他日「歴史地理」上で連載中の「倭人考」の稿をついで論究する積りであるから、今は其の說に及ばないが、要するに余輩は、濱田君の原始繩紋土器の說には、全然贊成することが出來ないことを、こゝに斷言するの確信あるものと承知されたい。

六、人種問題に就いて

濱田君は暫く骨骼上の問題を別にして、此等遺

蹟の考古學的研究の結果より、其の遺蹟を遺した民族の人種說を述べられた。是れ大いに我が意を得たものである。余輩と雖骨骼上の研究の最も必要なる事を認め、斯道學者の熱心なる研究を衷心より歡迎するものである。併しながら遠い過去に發表せられて、今に至つてなほ常に斯道學者間に、アイヌ若くは日本人の骨骼の標準として、引用對照せられるところのものに就いては、果して如何ばかりの信を措くべき物かといふ事を、疑はずには居られぬ。又よしやそれが今日の全アイヌ族の平均數であり、全日本人の平均數であるとしても、それが現在の個々のアイヌなり、又は日本人なりに比して、如何ばかりの相違點と一致點とが認められるであらうか。又遠い過去のアイヌなり、日本人なりが、果して今日のアイヌなり、日本人なりと同一の計數を示して居たであらうか。本來人種や民族の相違の起つたのは、彼等が長い年月の間、異なりたる四圍の狀況の下に、異なりたる生活を繼續したが爲であらねばならぬ。それがどの位の歲月の間に、どの位の相違を來したものであるかは、門外漢たる余輩は、固より之を解し得ない。併しながら、雜婚其の他の事情が手傳つて、案外短かい間にも、比較的著しい變化が起り得るのではなからうか。身長の如きも人類學上重要なる研究材料となるのであるが、而もそれが我が國では、些少の生活狀態の變化の爲に、維新以來僅に三十年の間に於て、著しい相違を來した事實の存在を否定する事が出來ない。果して然らば其の他の點に於ても、よしや其れ程までに著しくはなくとも、案外短かい期間に或る相違を來し得るものではなからうかとの、素人的疑問を試みるのが絕對に不條理であるであらうか。余輩は一般識者と共に、我が日本人が明かに複合混成の民族である事を信ずるものである。而も其の複合混成たる

や、未だ十分に咀嚼されたのではなくして、屢々異民族雜居の狀態にある場合の少からぬことをも認めて見たいのである。然るに其の所謂日本人なるものゝ、而も少數の骨骼を調査して、果して其の平均數が所謂日本人の標準として、學問上十分の價値を認め得られるであらうか。而して更に之を以て、遠い過去の時代の遺骨と比較して、そこに相當なる判斷を求める事が出來るであらうか。現在のアイヌ族間に於ては、所謂日本人間に於けるが如き著しい相違はなからうが、輕重多少の差こそあれ、余輩は其處にも同樣の事實の存在を認むるに躊躇せぬのである。されば余輩は、理想としては遺骨の研究上より、其民族の所屬を決定するの可能を信じ、大体に於て斯道學者の研究の結果を敬重するに吝ならぬのではあるが、現在の如く研究臺上に上さるゝ遺骨の數の甚だ少く、而も其の中往々不完全なるもの多きの際に於て、殊に其の對照たるべき標準計數の不安定なる時に於て、濱田君が暫く之を度外に置き、考古學的研究上より其の說を求めんとせらるゝ態度に就いては、學界現下の狀態の下に、余輩全然贊意を表せざるを得ない。

併しながら、其の所謂考古學的研究の結果に於ては、余輩は不幸にして濱田君に同意することが出來ない。濱田君は河內國府なる此の彌生式土器の遺蹟を以て、アイヌ系以外の「原日本人」のものだと認定されて居る。而して此の点に於て、鳥居君等と見を同じうすると言つて居られるのである。而して余輩は、先づ此の「原日本人」なる語に就いて、既に業に多少の異說を有する。成る程彌生式土器を使つた石器時代住民が、後の日本民族を構成する一大要素であることは、余輩と雖敢て之を疑はない。隨つて之を「原日本人」と稱すにも、敢て甚しく不可なき樣ではあるが、余輩の見

る所によれば、彼等は我が建國の古傳說を有する天孫民族とは、別系統なる先住土着の民族である。隨つて之に「原、本人」なる名稱を負はす事が、史實を混亂せしめる虞がないではなからうかと、憂慮せざるを得ぬ。又、其の名稱も頗も曖昧である。濱田君は鳥居君と此の点に意見を同じうすと言つて居られながら、其所謂「原日本人」、即ち「プロトジャパニース」を、鳥居君は「固有日本人」即ち「ジャパニース、プロパー」と云つて居られるのである。此の兩語が果して同一意義を示して居るであらうか。此等の事亦、我が「倭人考」の續稿に於て詳論すべく豫期するが故に、こゝに其の說を述べることを省畧するが、ともかくも此の点に於て、先づ濱田君なり鳥居君なりと、一致し難いものであることをこゝに告白する。

併しながら、それは暫く措き、又假りに其の名稱の如きも暫く之を問題外なりとするも、此の河內國府發見の遺骨より見たる人種問題の塲合に於ては、余輩は之を以て、濱田君の所謂原日本人、鳥居君の所謂固有日本人たる所の、彌生式土器使用民族とは、別系統の者ではないかとの疑を有するものである。そは上層より彌生式のみ、又は彌生式と齋瓮とが混淆して發見せらるるに拘らず、遺骨の存在せる下層からは、前述の如く全く其等と別系統と認められる、繩紋土器のみが發見せられる事實の存在する爲である。此の事實が確である以上、余輩はどこまでも上下兩層位の間に、民族上の相違を想像して見ねばならぬではあるまいか。勿論濱田君の如く、双方の土器を同一系統の下に置くならば、問題の解決は簡單であるが、同一地点に於ける此の兩種の土器が、中間物の存在を示さず、層位によつて忽ち樣子を異にして居る上は、其間に甚だ村落の長い中斷時期を想像せぬ以上、異つた民族の遺物と見るを至當とする。其

の繩紋土器を伴へる遺骨が、果してアイヌの其れであるか否かは暫く別問題とするも、少くも國府の遺蹟には、前後兩系統の民族の入れ代りのあつた事を、余輩は想像して見たい。有史時代には此地は土師の里として、所謂「土師の器」即ち彌生式土器を使用した土師部の民族が、石器時代より引き續いて其の時代まで存在し、民族の混淆と文化の融合とによつて、所謂齋瓮をも使用するに至つたものであらうが、而も其の地には、實は遠い以前に於て、彌生式とは全然別系統なる繩紋土器使用の石器時代民族によつて住まはれたことを忘れてはならぬ、。而して彼等はこゝに埋葬せられて、遺骨を今日に止めたのではなかつたであらうか。京大發掘以後數回の調査は、余輩をして此の臆說を提出せしむるに十分なる材料を余輩に供給した。更に將來の調査の結果を待つて、此の臆說の是非を判斷して見たいと希望する。

尙此の遺蹟に就いて、下層に石器の少く、上層に其の甚だ多く存する事や、銅鏃・曲玉・管玉の存在の事情や、完全なる土器の深く穿たれたる壙中に多く存した事や、遺骨に伴へる耳環などに就いて、論述したい事が甚だ多いが、それは本書の批評の範圍外に屬するから、今はすべて省畧に附する事とする。

七、餘談

濱田君の研究に關する余輩の批評は、右述べた所を以て暫く擱筆する事とする。要するに本書は、京大自身發掘に關する事のみの報告で、一も其後の調査發掘の事に關せず、殊に其の成れるや、最も多くの成果を擧げた第四回發掘の以前であつたから、國府遺蹟の研究として、論證に於て尙物足らぬ点のあるのは、實際已むを得ない所である。殊に其當初選擇した地点が、比較的多く攪拌せられた場所のみであつたのは惜しかつた。所謂B地

点に於ては、たゞに其上層が傍近の地から移された土壤であつたばかりでなく、其の下層に至つても、後の研究者の發掘の地点に完全なる數体の遺骨の發見されたのとは趣を異にして、往々深く攪拌せられた形迹があり、其の遺骨は破壞せられて居つた。其比較的完全なる第二號人骨の附近よりすら、明かに後世の混入なるべき蓋坏の發見せられた程である。隨つて層位的研究の結果を得る点に於て、遺憾少くなかつた事を惜まざるを得ぬ。併しながち偶然にもせよ、濱田君の此の調査が三体の遺骨に掘り當てゝ、此遺蹟の甚だ貴重なる事を學界に紹介し、爾後引續き數回の發掘作業を誘致するに至つた功績の沒すべからざると同樣に、同君の此の報告が、其の調査の經過を最も忠實に紹介し、極めて精密なる多くの圖版によりて、一々之を明瞭にし、學術的發掘作業は斯くの如く行はるべく、其の遺物調査は斯くの如く施さるべきものたるの範を學界に示されたる勞は、こゝに特筆大書して賞賛の辭を呈し、之を江湖に推奬しなければならぬ。

本書には別に、梅原・島田兩君の手に成れる、南高安及び喜志の彌生式遺蹟の調査報告と、鈴木博士の手に成れる、人骨の研究並に石器時代住民論とを載せてある。前者は例によつて極めて忠實な報告で、余輩は是に由つて兩遺蹟の實際を目のあたり見るが如く了解し得た事を、感謝せねばならぬ。後者は余輩門外漢の殆ど與り知るを得ざる所。たゞ博士の忠實なる研究の勞を謝し、斯の如き學說の學界に存在するを知るに滿足せざるを得ぬを遺憾とする。但其の人種論に至りては、余輩の信ずる所と甚しく背馳するものなることをこゝに告白するの自由を保留したい。殊に其のアイヌ族が日本建國以後に南下し、日本人との接觸界線が津輕海峽を上下すべしと云ひ、史上の蝦夷が或は日

本民族の一部なるかも圖り難く、恐らくは現代アイヌと同視すべきにあらずとの見解に至つては、史學の敎ふる所と全然相容れざるものであることを、こゝに明言するを憚らないのである。

參照　河内國府遺蹟最古の住民に就て（歷史地理三二の四）

紹介

●圖書

●朝鮮佛敎通史

李能和著

佛敎の朝鮮に傳來してより人心これに浸潤し、高麗に至つて政敎一致隆盛の極に達せしと共に漸く衰兆を呈せしが、朝鮮に入りて遂に反動的恐慌を來し、其宗派は禪敎二宗に限られ、寺刹は破壞せられ、僧侶は虐遇を受けたり。されど積年の信仰もとより一朝にして拂拭し得べくもあらず。加ふるに名僧知識の此間に輩出して頽瀾を支ふるものありしかば、數千年の古刹儼として各地に存し、佛像經論等世界に誇るべき遺物を今に傳ふるもあり。只從來朝鮮佛敎の沿革を徵すべき史籍の極めて希れなるは一大缺典と謂はざるべからず。然るに余今夏京城にありて始めて李能和氏に朝鮮佛敎通史の新著あるを知り、歸來著者より一書を寄せて批評を求めらるゝに遣ひ欣慰に堪へず、著者に從へばこれ其過去十有五年潛心研鑽の餘に成れるものなりと、本書の學海に寄與することの多きも知るべきなり。

本書は上中下の三編二册より成り、上編は佛化時處と題して三國時代より總督府時代（大正五年）に至る迄の歷史を編年體に叙述し、これに附するに三十本寺と其末寺とを以てせるもの（菊版、四號活字、六七四頁）中編は三寶源流と題し、項を分つて佛敎の起源より其支那傳來以後の重なる史實を略叙し、次に佛敎の各流派につきて一々其開立傳統盛衰を簡述し、特に臨濟禪の源流より朝鮮に於ける其嫡派を詳說して近世の兩大立者たる淸虛浮休に攝筆せるもの（三七七頁）これを第一册となし、下編は二百品題と題し出西域二千年歷史以下の八字二百餘題下に直接間接佛敎に關係ある各種の事項を煩筆體に列叙し、終りに宗敎小說二編を附載せるもの（一二四八頁）これを第二册となす。全編漢文を用ゐ、間々諺文を交へしところあり、且つ考據するところは、朝鮮支那及び我國の諸書に及び、備考參考の下に語錄行狀碑銘塔銘等を收め、其中には又坊間容易に得難きものあり、而して所說多少の議すべきものあるも、概れ穩健にして創見に乏しからず、各編首に